

日本とアラブ世界

過去と未来を模索する

ベッサム・タイヤーラ氏インタビュー

フランスにいと、日本にいとよりアラブ世界をより身近に感じる日本人は多いだろう。しかし、日本とアラブ世界の関係について書かれた本は、意外に少ない。このテーマを、日本人のアラブ世界観という視点から、膨大な歴史的资料を駆使して論述したが、日本とアラブ人の著書で日本学者のベッサム・タイヤーラ氏である。日本語の堪能なタイヤーラ氏に、近代と現代のアラブ世界と日本の関係について語って頂いた。

「もともと数学のご出身ですが、どのようなきっかけで日本語を学ぶことになったのですか。」

パリの大学で数学の勉強を続けながら、ジャーナリストの仕事をしていましたが、仕事が忙しくなって大学を続けられなくなり、学業は断念しました。けれども、大学に戻りたい気持ちはいつもありました。それで、あるときかつての指導教授に相談したら、意外にも言語学を勧められました。教授の考えでは、私が大学を9年離れていた間に数学の世界が変わりすぎてしまったので、数学研究を再開するのは難しい、しかし言語学なら私が専攻していた応用数学の知識が使えるということでした。とくに母国語のアラビア語や、私が学んだフランス語、英語と

はまったく体系の違う言語を学んでみては、と勧められました。

1988年当時は日本語が非常に人気があったので、私も日本語を選んだのです。日本語や日本について、特に知識があったわけではありません。昼間は記者の仕事をして、夜、仏国立東洋言語・文明研究所 (INALCO) に通いました。

「日本とアラブ人の本を書くと思われたきっかけは何ですか。」

INALCOの修士論文のテーマに、明治の政治小説「佳人之奇遇 (かじんのききぐう)」の著者、東海散士 (とうかい・さんし注1) を選びました。修士コースで日本の政治小説がテーマにあり、明治の政治小説を調べて

いるうちにこの小説を発見したのです。

米国の大学で経済学を取め、広く世界を見聞した政治家でもあるという、東海のスケールの大きさに引かれる一方、私は小説も書くので、小説家として東海散士にも魅力を感じました。

とくにこの小説には、エジプトのウーラビ・パシヤ (注2) が出てきます。こうして私が、日本とアラブ世界の関係に思いをはせるようになったのは当然のなりゆきでした。けれども、それについてフランス語で書かれた書物はありませんでした。そこで自分で書くことになったのです。

「日本とアラブ人」の中で「日本人は明治時代に、植民地化された国の人々に連帯感を感じながら、いつも西洋人の視点を通してアラブ世界を見てきた」とあります。

これは非常に興味深いテーマです。1895年まで、日本人は、植民地化された国々に対し、同情を抱いていました。それが変わったのが、1900年、北清事変 (注3) で派兵したときからです。

「イラク戦争で、日本が初めて戦地に自衛隊を海外派遣したのと似ていますね。日本は、米英の同盟軍として自衛隊を送り込みました。アラブ世界とは植民地的関係がなく、中立的な立場にあった日本が、侵略する側の仲間になったわけですか。」

まったくその通りです。ただ、北清事変との違いは、北清事変のときは、日本が今のイラクでのアメリカ軍の役割を果たしていたことです。反乱鎮圧のために、列強が中国に派兵しましたが、一番兵士を多く送り込んだのが日本でした。そのときから、

日本は被植民地国に対する同情を失い、植民地化する側に回ったのです。

明治の前半、日本は、英国に植民地化されたエジプトや、フランスに植民地化されたチュニジアに関心を持ちました。日本がこれらの国から植民地化されないよう、植民地化する側の支配の仕方を研究するのが、その目

2003年発行の「日本語文法入門」



1998年発行の「日本語の仕組み」。ともにマアーリフ出版社



仏アラブ日本友好協会の会長でもあるタイヤーラ氏

とを、朝鮮半島や中国を植民地化するのに利用しようとしたのです。この日本の政策の変化は非常に重要です。

「戦後の日本は、アラブ世界をどう見ていたのでしょうか。」

1945年から60年まで、日本はアラブ世界にほとんど関心がありませんでした。73年の石油ショック後、日本政府はアラブ世界を研究することの重要性に気づき、アラブ文化を研究するセンターを国内のあちこちに作り始めました。こうしたセンターは30年代から存在していましたが、欧米の資料を元にせず、直接アラブ研究を始めようとしたのが、73年以降です。現在、日本にはアラビア語を学べる場所が80以上あります。

「日本は、アラビア語を学ぶことでどういった利益があると考えたのでしょうか。」

日本はイスラム文化圏に囲まれています。インドネシア、マレーシア、中央アジア、パキスタン：中国にも1億人のイスラ

ては不可能なのです。もちろん、石油もあります。イラクに自衛隊を派遣したのは、実は石油のためです。政府がイラク戦争に参加したのは、日本がアメリカの傘下にあるからではなく、石油に代わるものがないからです。

イラク戦争に対する一般日本人の気持ちは、(戦争に反対したフランス人とあまり変わらないと思います。ただ日本にはフランスのようにアルジェリアやコンゴがあるわけではない。石油というケーキの分け前にあずかるためにイラクに行つたのです。

「そのためにアラブ諸国での日本観が悪くなったというところはありませんか。」

大半のアラブ人は反米ですが、アラブ諸国の政府は反米ではないのですよ。(笑)。アラブ諸国の多くはアメリカに依存しています。たとえば、サウジアラビアはアメリカに石油を売っている。またエジプトは、アメリカの援助なしにはやっていけません。



自著をひもとくタイヤラ氏

日本人と日本政府の考えが違ふことは十分わかっています。そもそも自分たちは反米なのに自分たちの国の政府は、アメリカ追従ですから。日本も同じだと理解しています。ですから、日本の人々への感情が悪くなったというのではないと思います。

アラブ世界のマスコミが報道する日本やアラブ諸国の政府が捉えた日本と、アラブ人がイメージしている日本の間には隔たりがあります。日本は、アラブ諸国の政府に政治大国とは見なされておらず、経済援助以上の存在ではありません。しかし一般のアラブ人にとって、日本は伝統を保ちながら近代化に成功した特異な国という賞賛の目で見られています。

同じように、日本政府と日本人一般のアラブ世界観も違います。政府にはアラブ世界の専門家がいますので、アラブのことはよくわかっています。一方、日本のマスコミは、なにか事件が起きたときしかアラブ世界のことを報道しないので、一般の日本人は、アラブという問題のあるところだと思っています。つまり、アラブ世界には2つの日本観があり、日本にも2つのアラブ世界観があるのです。

「今後、日本とアラブ諸国の関係はどのように変わっていくのでしょうか。」

政府レベルではそれぞれの国に詳しい専門家がいますので、交流の問題はありませんが、一般市民のレベルでは、お互いに知らない部分が多いのです。アラブ諸国は貧しいですが、日本は大国ですから、日本からアクションを起こすべきです。もっとオープンになって、市民レベルで文化交流をしてほしいと思います。

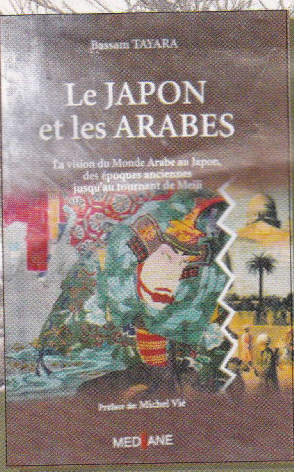
それはアラブ世界に日本の専門家は育ちません。英米、仏、中国はアラブ諸国に自分の国の言葉を教えるセンターを作っています。日本も、日本語を学べるセンターを設けるべきです。もう一つ、日本からアラブ世界に伝えてほしいことがあります。日本には北海道から沖縄まで、多様な文化が共存していて、それが日本を個性的な国にしていきます。ところがアラブ人は、

タイヤラ氏の話は、示唆に富んでいた。仕事と学業を両立させるといって、けつて楽ではない生活を何年も続け、前人未到の領域を開拓した氏に敬意を表したい。

(注1) 本著柴四郎。1895〜1962年。元会津藩士。明治の政治家で小説家。自らの外国体験を元に、米、欧、アラブ世界の政治的動きを背景に書いた大河政治小説『佳人之奇遇』全8巻を、13年にわたって出版。主人公の東海散士は、留学先の米国で独立運動家のアイルランド女性、革命家のスペイン女性、独立運動家の中国人男性と知り合う。その後散士は旅の途中で何度も彼らやその友人と出会い、彼らが政治運動の中で訪れた国々の事情を知る。書き下し文で書かれた『佳人之奇遇』は、当時の世界情勢を学ぶベストセラーになった。

(注2) オスマントルコ支配下のエジプトで、独立を求めて戦つた革命家。1838〜1911年。エジプトを植民地化しようとする英仏とも戦つた。1882年の戦いで敗退。英国から死刑を宣告されるが恩赦を受け、セylonに亡命した。『佳人之奇遇』で、主人公がウーラビ・バシヤから独立革命の話の場面があることから、柴四郎が実際に亡命中のウーラビ・バシヤと会つた可能性がある。

(注3) 外国の列強の支配に不満を抱く政治宗教集団「義和団」が起した反乱を清国政府が支持し、英米、独、仏、日、露など列強の連合軍との戦いになった。日本は、初めて欧米の列強の同盟軍の一員として参戦した。



膨大な資料を駆使し日本とアラブ世界を論じた『Le Japon et les Arabes』

「日本とアラブ人 - 古代から明治時代までの、日本におけるアラブ世界観」 "Le Japon et les Arabes - La Vision du Monde Arabe au Japon, des époques anciennes jusqu'au tournant de Meiji" 誤解を重ねながらも、日本がアラブ世界について、中国やヨーロッパからの書物や渡来物を通して知識を広げていったことが歴史を追って書かれている。本文はフランス語だが、固有名詞や引用箇所日本語の原文が添えられているのでわかりやすい。EDITIONS MEDIANE 2004, PARIS



『Le Japon et les Arabes』出版元のMEDIANEで

氏インタビュー

羽生のり子



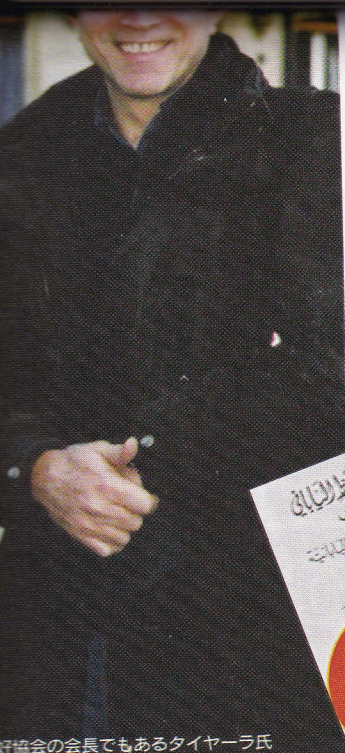
どて戦地
を似てい
暈とし
アラブ
く、中立
降する

日本は被植民地国に
対する同情を失い、
植民地化する側に回
ったのです。
明治の前半、日本
は、英国に植民地化
されたエジプトや、
フランスに植民地化
されたチュニジアに
関心を持ちました。
日本がこれらの国か
ら植民地化されない
よう、植民地化する
側の支配の仕方を研
究するのが、その目
ざから、

2003年発行の「日本語文法入門」



1998年発行の「日本語の仕組み」。ともにマアールフ出版社



好協会の会長でもあるタイヤーラ氏

トム・タイヤーラ Bassam TAYARA氏プロフィール

年生。日本学者、ジャーナリスト。母国レバノンの大学で数学を専攻した後、76年渡仏。パリ大学で数
課程に在学中、アラビア語誌の記者となる。その後、学業を中断。しかし「アル・ワタン アル・アラ
」発行、「アル・ハヤト」(ベイルート発行)、「アル・ワサト」(ノヴァレーン発行)でのジャーナリスト活
わら、INALCOで日本文学の学位と修士号を得、日本史研究でDEAを取得。90~91年、国際交流基金
大阪外語大に留学。現在は、フリーランスのジャーナリストとして活動しながら、博士論文を準備中。
「日本旅行ガイド」(アラビア語)など多数。アラブ語圏の日本語学習者向けに、98年に「日本語の仕組
03年に「日本語文法入門」(ともにマアールフ出版社AL-MAAREF)を出版。タイヤーラ氏が会長を務
ラフ日本友好協会Association Franco-Arabe des Amis du Japonでは、アラブ世界と日本をつなぐ
を企画している。連絡先: afaaj@wanadoo.fr